

状の製品は活性炭、シリカゲル、ゼオライト等から成り消化管からほとんど吸収しないので毒性は低い。液体の製品はエタノール等を含む製品が多い。また、寝たきりになっている人が使うポータブルトイレ用の消臭剤は製品としての毒性は比較的低い。有機酸を含有している製品は刺激性がある。高齢者の近くで使用することが多いため、高齢者の事故が多くみられる。2007年 JPIC への問い合わせ件数は芳香剤等 1,389 件で、うちポータブルトイレ用消臭剤は 37 件であった。37 件中高齢者による事故が 34 件とそのほとんどを占めていた。事例 15 は認知症の高齢者がベッドサイドに置かれたポータブルトイレ用消臭剤を誤飲し誤嚥性肺炎が出現したため死亡した典型例である。誤嚥性肺炎が出現した場合は生命にかかわるため注意が必要である。事例 16 は外見が食品のゼリーに似ているため認知症の高齢者が間違えて摂取した事例であるが芳香剤による中毒症状ではなく、誤嚥性肺炎を起こした特異例である。

6) 使い捨てカイロ

使い捨てカイロは袋から取り出して振るだけで発熱する安全な簡易カイロである。2007年 JPIC への問い合わせ件数は 49 件でうち高齢者が 22 件であった。事例 17 は認知症の高齢者が誤食した事例である。使い捨てカイロに含有する鉄は一般には無毒に近いものと考えられている。しかしながら、この事例のように一定量以上摂取した場合の肝由来酵素異常がみられることがあり、肝酵素上昇については今後検討が必要と思われるのでこの事例は特異例である。

7) 紙おむつ類

紙おむつは肌にふれる表面接触体と吸

収体（綿状パルプ、高分子吸収体）と外側の防水体からなる。摂取しても中毒の心配はないものであるが、水分を吸収することにより膨張し窒息などを起こす可能性がある。2007年 JPIC 問い合わせ件数は 126 件で高齢者による事故はそのうち 27 件であった。事例 19 は認知症の高齢者が紙おむつを誤食し、非吸収性の物質による腸閉塞を起こした特異例である。

8) 液体蚊取り

殺虫成分はピレスロイド剤で、灯油が溶剤として使用されている。小児の誤飲程度では中毒症状の出現の可能性は低い。大量に摂取した場合、および誤嚥した場合は重症化することがある。2007年 JPIC 問い合わせ件数は 332 件で家庭用殺虫剤の中では最も問い合わせが多かった。事例 20 は認知症の高齢者に溶剤の灯油を誤嚥したため出現した化学性肺炎で死亡した事例であり、化学性肺炎が直接の死亡原因となった典型例である。

9) ホウ酸含有殺虫剤

主としてゴキブリ用の殺虫剤と使用されるものでホウ酸含有量は市販品では 5～70%、手作りのもので 50%以上のものが多い。2007年 JPIC 問い合わせ件数は 416 件で小児の問い合わせが圧倒的に多かった。事例 21、22、23 は認知症の高齢者による事例、食品と間違えた事例等の典型例であり多量に摂取したためいずれも中等症～死亡と重症化した例である。

10) シンナー、ガソリン

シンナー、ガソリンは産業現場等で主に使用されるが家庭においても日曜大工や農作業等で使用することがある。家庭で使用する場合飲料用容器に移し替えて保存して

いるものを知らずに摂取するなど誤使用による事故が多い。2007年 JPIC 問い合わせ件数はシンナー56件、ガソリン43件とともに成人層の事故が多かった。事例24はペットボトル等の飲料用容器に保管しているものを誤飲した典型例である。

これらより高齢者の典型的な中毒事故の起因物質と状況を解析することにより事故予防のための要注意物質と事故実態が明らかになった。

D. 考察

JPICの過去10年間の問い合わせ事例、医療機関受診事例、高齢者施設等の調査事例の解析を行った。

JPICの問い合わせ件数は小児の事故が8割を占め圧倒的に多いが、次いで成人の事故が1割以上であった。しかしながら、問い合わせ件数では成人より高齢者の事故は少ないが対人口比に補正すると高齢者の事故が多く発生していることが判明した。中毒の起因物質は家庭用化学製品が圧倒的に多く、手あたりしだい口にする0~5歳の小児では起因物質の大部分を占めており、高齢者で約6割、他の年齢層でも約3割から5割を占めていた。これより全ての年齢層で家庭用化学製品による中毒事故が多いことより身の回りで使用される物質が原因物質となりやすいことが判明した。高齢者のみならず中毒事故発生予防は身の回り品の徹底した管理が重要であることが考えられる。

高齢者の事故のうち8割以上を占める不慮の事故は、60歳代、70歳代に比べ80歳代、90歳以上と高齢になるほど多く発生し

ており、また、発生状況も認知症による事故が約35%と多い。これらより、高齢者では加齢とともに視覚や味覚、嗅覚の衰え、および、認知症など既往症のため事故が起こりやすくなることが考えられる。

また、JPIC 問い合わせ事例でも直ちに受診を勧める割合が小児の約2.5倍、医療機関受診例で入院加療を必要とする症例が小児の2.7倍、有症率が約3倍（小児の14.1%に対し高齢者は41.0%）であり、小児に比べ高齢者は重症化しやすいと言える。

高齢者で事故が多い製品は、JPIC 受信事例や高齢者施設等の調査より、身の回りの生活用品、高齢者特有の製品であることが判明した。身の回りの生活用品で成人と比して多かった製品は、乾燥剤では生石灰、防虫剤ではパラジクロルベンゼンなど碁石状の製剤などであり、それらの原因物質による事故は食品についているため食品と勘違いしたり、形が食品と似ているために起こることが考えられる。高齢者特有の製品で、成人と比して多かった製品はポータブルトイレ用消臭剤、義歯洗浄剤などであり、これらは高齢者にとっては身のまわりにある生活用品と同様の理由により事故の起因物質になりやすいことが考えられる。

中毒を起こさせる化学物質は何十万とあるが、日常的に中毒事故が起こりやすいものには限りがあり、生活の場にある物質に限定される。毒性が低く心配のないものから毒性が高いものまで様々である。身近にある化学物質の特性などとそれらがどのようにして中毒事故の起因物質となりうるかを知ることにより中毒事故を予防することが可能となるため、啓発教育が必要と考える。また、高齢者の中毒事故防止には、

生活の場や高齢者の状態に応じた介護現場の整理、および、管理を行うことが必要であるため、介護者、家族等への中毒事故に関する知識向上を図る啓発教育の実施が不可欠と考える。啓発教育方法は短時間での確かな教育が可能な媒体である DVD、ビデオ、パンフレット等の作成、および、実際に中毒事故が起きた時に備えた応急処置の実地講習等が有効であると考え。

今回我々は典型的な中毒事故の共通点を解析し、要注意物質とその事故実態を明らかにした。これらの事例を基に中毒 110 番市民向け啓発教材として「みんなで防ごう！身近な中毒事故」高齢者編を作成した。本教材を活用することにより高齢者を取り巻く介護者、家族らが中毒事故発生状況等を理解することにより高齢者の中毒事故は予防できると考える。

E. 結論

JPIC の過去 10 年間の問い合わせ事例、医療機関受診事例、高齢者施設等の調査事例の解析を行った。

家庭用化学製品による中毒事故が多いことより身の回りで使用される物質が原因物質となりやすい。また、高齢者では加齢とともに身体機能の衰えにより事故が起こりやすく、小児等に比べ重症化しやすいと言える。

高齢者による中毒事故防止には、生活の場や高齢者の状態に応じた介護現場の整理、および、管理を行うことが必要であるため、介護者、家族等への中毒事故に関する知識向上を図る啓発教育の実施が不可欠と考える。啓発教育方法は短時間での確かな教育が可能な媒体である DVD、ビデオ、パンフ

レット等の作成等が有効であると考え。

今回我々は典型的な中毒事故の共通点を解析し、要注意物質とその事故実態を明らかにし、これらの事例を基に中毒 110 番市民向け啓発教材として「みんなで防ごう！身近な中毒事故」高齢者編を作成した。本教材を活用することにより高齢者を取り巻く介護者、家族らが中毒事故発生状況等を理解することにより高齢者の中毒事故は予防できると考える。

参考文献

- 1) (財)日本中毒情報センター：1996年受信報告. 中毒研究 1997; 10: 183-202.
- 2) (財)日本中毒情報センター：1997年受信報告. 中毒研究 1998; 11: 159-178.
- 3) (財)日本中毒情報センター：1998年受信報告. 中毒研究 1999; 12: 187-207.
- 4) (財)日本中毒情報センター：1999年受信報告. 中毒研究 2000; 13: 201-220.
- 5) (財)日本中毒情報センター：2000年受信報告. 中毒研究 2001; 14: 145-164.
- 6) (財)日本中毒情報センター：2001年受信報告. 中毒研究 2002; 15: 195-225.
- 7) (財)日本中毒情報センター：2002年受信報告. 中毒研究 2003; 16: 213-243.
- 8) (財)日本中毒情報センター：2003年受信報告. 中毒研究 2004; 17: 173-203.
- 9) (財)日本中毒情報センター：2004年受信報告. 中毒研究 2005; 18: 165-195.
- 10) (財)日本中毒情報センター：2005年受信報告. 中毒研究 2006; 19: 173-203.
- 11) (財)日本中毒情報センター：2006年受信報告. 中毒研究 2007; 6: 159-189.

F. 健康危機情報

該当なし

G. 研究発表

1. 論文発表 未定

2. 研究発表 未定

H. 知的財産権の出版・登録状況

該当なし

表1 年齢層別問合せ件数(JPIC 1996年～2005年)

年齢	件数	件数%	対人口(100万人比/年)	人口10年合計(100万人)	人口10年合計(千人)
0-5歳	277916	80.6%	3937.9	71	70575.295
6-12歳	6243	1.8%	72.5	86	86070
13-19歳	4986	1.4%	49.3	101	101208
20-64歳	40355	11.7%	51.3	786	786449
65歳以上	15520	4.5%	69.3	224	223915
計	345020	100.0%			

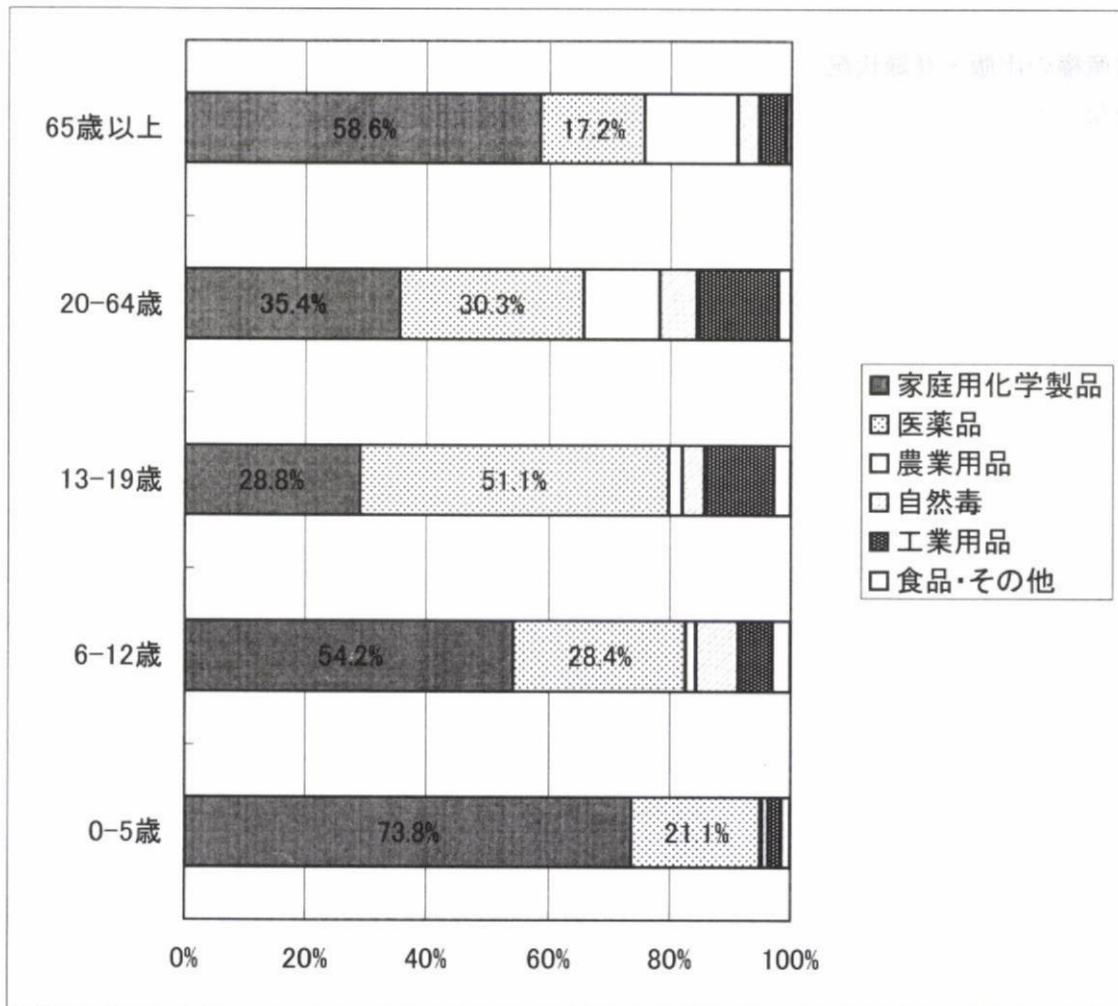


図1 年齢別 中毒起因物質の比較(JPIC 1996年～2005年)

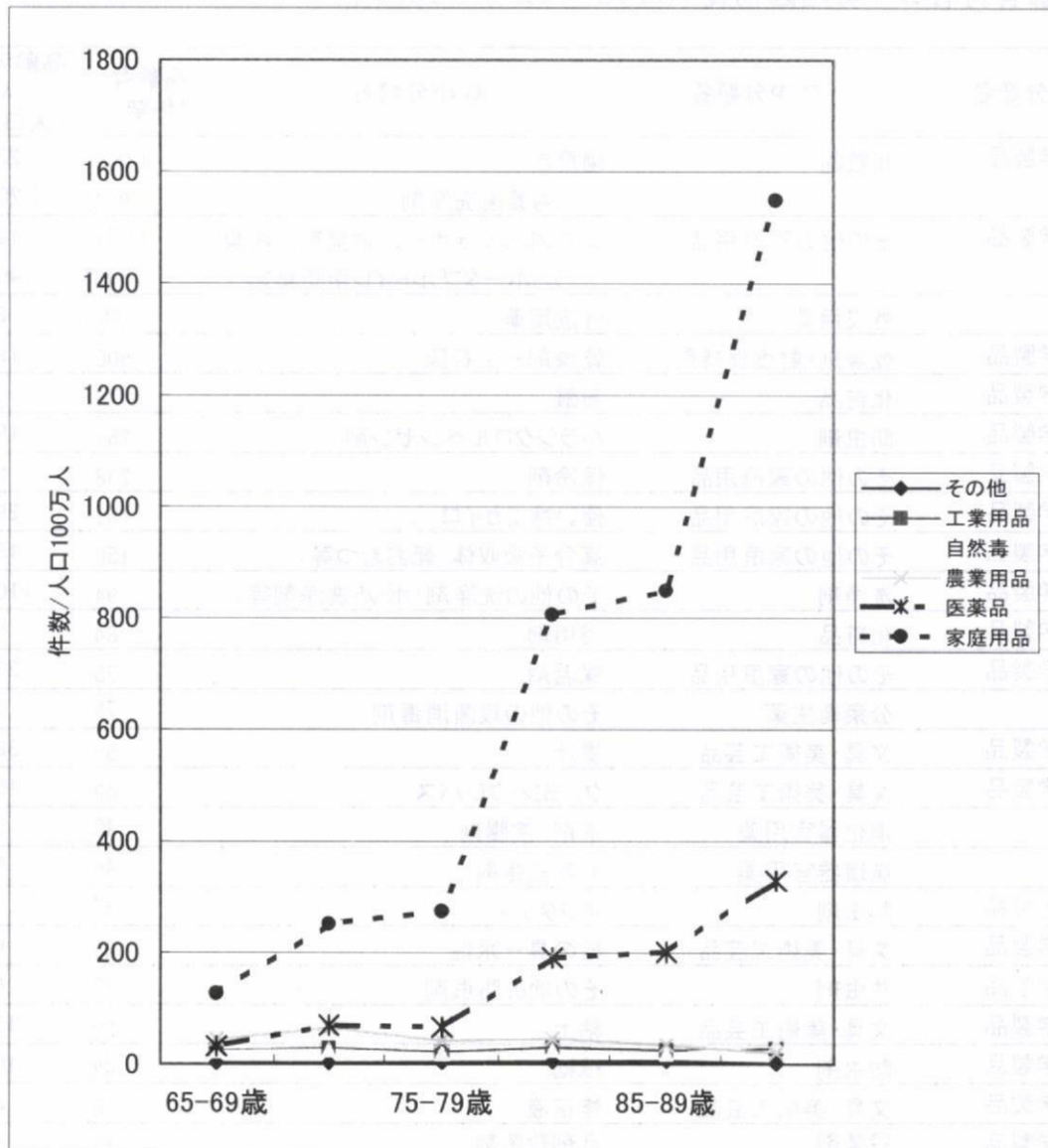


図2 高齢者層の年齢別不慮の事故 起因物質別発生頻度(JPIC 1996年～2005年)

表2 高齢者特有の中毒起因物質 (JPIC 1996年～2005年)

C_大分類名	C_中分類名	C_小分類名	高齢者 (件数)	高齢者/成人 (人口補正)
家庭用化学製品	化粧品	歯磨き うち義歯洗浄剤	1,055 [964]	23.602 [28.693]
家庭用化学製品	その他の家庭用品	エアフレッシュナー/消臭剤/脱臭 うちポータブルトイレ用防臭剤	1,031 [145]	15.744 [46.298]
医薬品	外皮用薬	外皮用薬	885	8.881
家庭用化学製品	乾燥剤・鮮度保持剤	乾燥剤一石灰	500	12.634
家庭用化学製品	化粧品	石鹼	376	7.768
家庭用化学製品	防虫剤	パラジクロルベンゼン剤	267	19.138
家庭用化学製品	その他の家庭用品	保冷剤	238	5.324
家庭用化学製品	その他の家庭用品	使い捨てカイロ	167	29.327
家庭用化学製品	その他の家庭用品	高分子吸収体(紙おむつ等)	156	18.346
家庭用化学製品	洗浄剤	その他の洗浄剤(ポット洗浄剤等)	94	110.051
家庭用化学製品	化粧品	浴用剤	84	5.785
家庭用化学製品	その他の家庭用品	保温剤	75	37.631
医薬品	公衆衛生薬	その他の殺菌消毒剤	75	5.165
家庭用化学製品	文具・美術工芸品	墨汁	55	38.635
家庭用化学製品	文具・美術工芸品	クレヨン・クレパス	49	15.646
医薬品	消化器官用薬	下剤, 浣腸剤	48	8.028
医薬品	循環器官用薬	血管拡張剤	46	5.770
家庭用化学製品	防虫剤	ナフタリン	34	7.464
家庭用化学製品	文具・美術工芸品	絵の具一水性	33	6.818
家庭用化学製品	防虫剤	その他の防虫剤	29	6.790
家庭用化学製品	文具・美術工芸品	粘土	28	12.293
家庭用化学製品	防虫剤	樟脳	24	10.537
家庭用化学製品	文具・美術工芸品	修正液	16	8.621
家庭用化学製品	殺菌剤	合剤殺菌剤	15	9.366
家庭用化学製品	洗浄剤	しみぬき剤, ドライクリーニング剤	13	5.073
家庭用化学製品	その他の家庭用品	固形燃料	12	42.336
家庭用化学製品	化粧品	メイクアップ化粧品一その他	11	5.519
医薬品	中枢神経系用薬	その他の中枢神経系用薬	10	8.781
医薬品	循環器官用薬	強心薬	10	7.025
家庭用化学製品	その他の家庭用品	ペット用品	9	6.322
家庭用化学製品	化粧品	パウダー類	8	28.098
医薬品	麻薬	麻薬	7	12.293
医薬品	公衆衛生薬	アルコール	6	21.074
医薬品	血液及び体液用薬	血液凝固阻止剤	4	14.049
医薬品	その他の代謝性医薬品	糖尿病用剤	3	10.537
家庭用化学製品	洗浄剤	予洗い・よごれ・しみ取り剤	3	10.537
家庭用化学製品	化粧品	不明の化粧品	3	5.268
家庭用化学製品	文具・美術工芸品	絵の具一その他	2	7.025

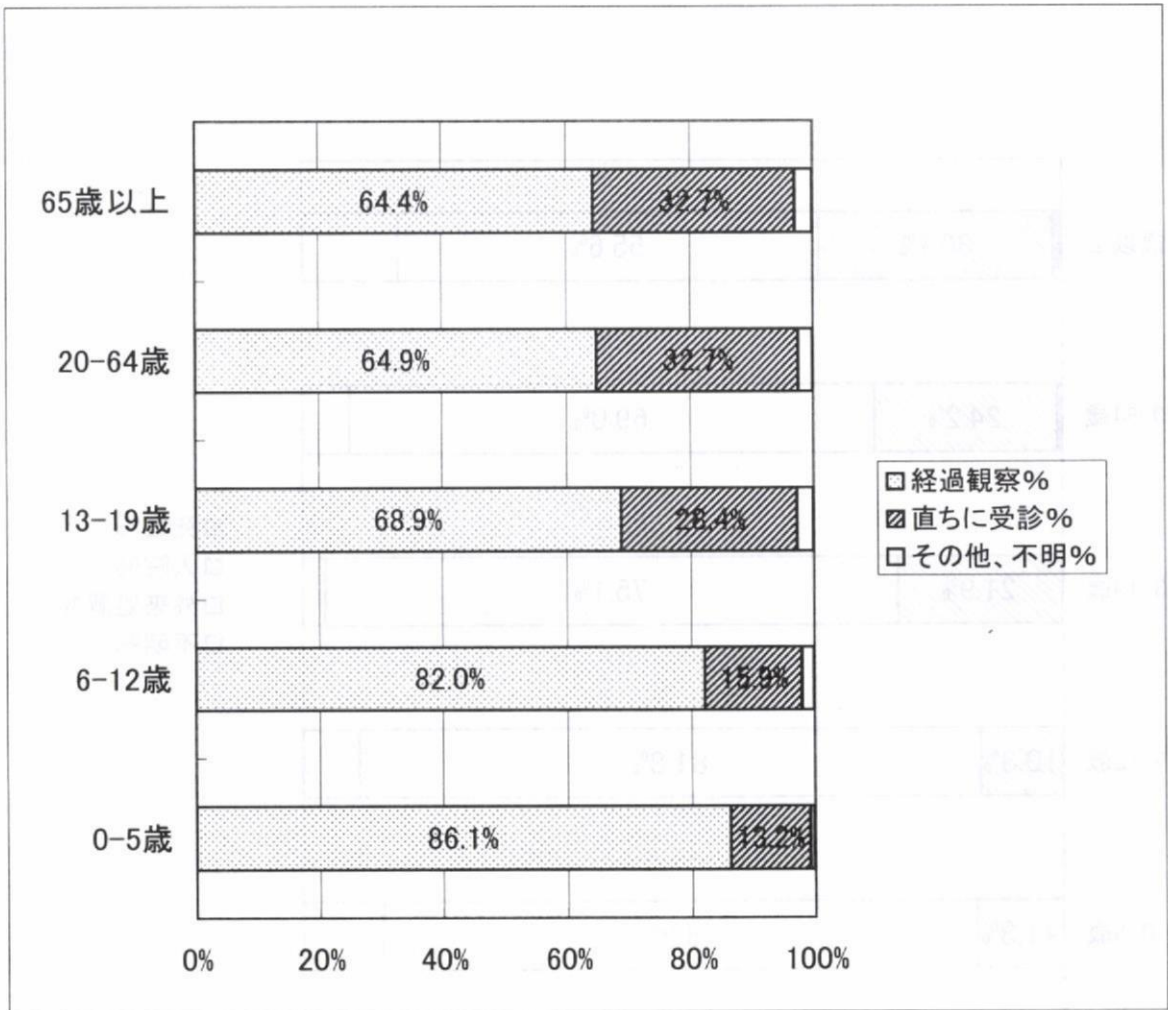


図3 一般市民からの問合せ(不慮の事故)への回答(JPIC 1996年~2005年)

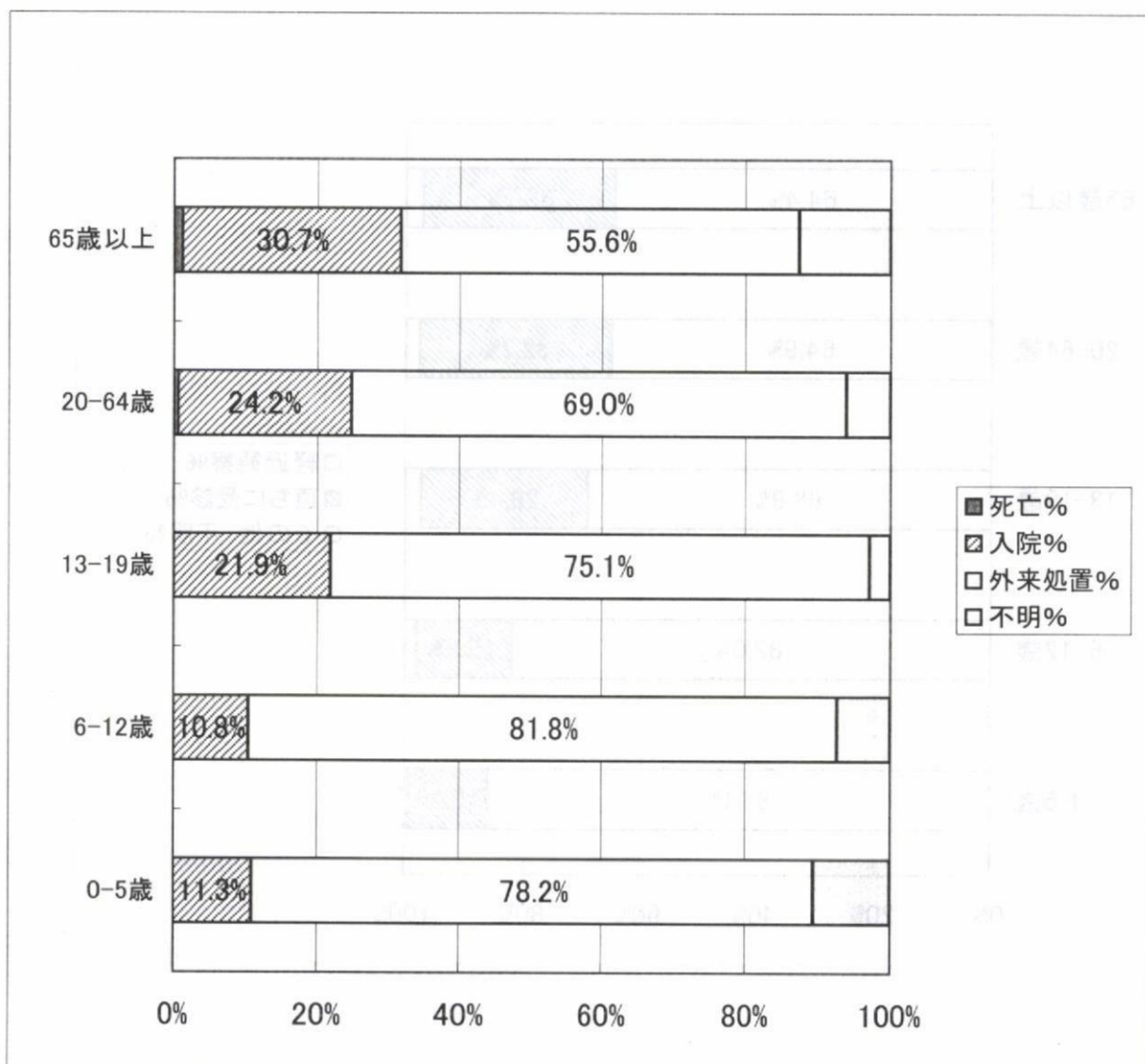


図4 医療機関受診例(不慮の事故)の転帰(JPIC 2003年～2008年)

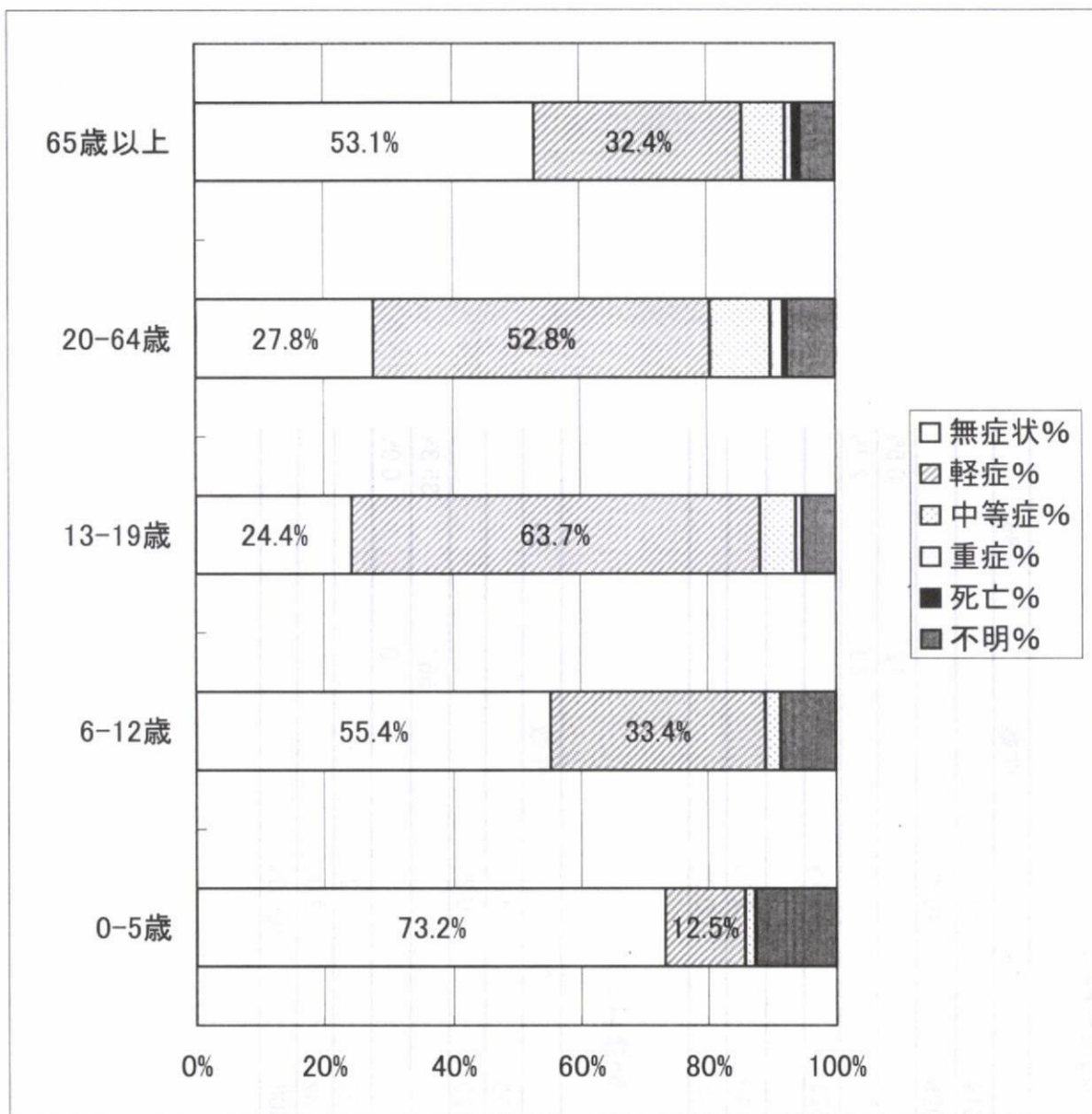


図5 医療機関受診例(不慮の事故) 年齢別重症度(JPIC症例 2003年～2008年)

表3 不慮の事故 発生状況 (JPIC 2005年 20歳～64歳)

	件数 (n=2315)	%	件数	%
勘違い、誤用	1014	43.8%		
その他	926	40.0%		
うち、認知症			12	0.5%
うち、知的発達障害			63	2.7%
就労中	326	14.1%		
不明	49	2.1%		
計	2315	100.0%		

表4 不慮の事故 発生状況 (JPIC 2005年 65歳以上)

	件数 (n=1608)	%	件数	%
勘違い、誤用	395	24.6%		
その他	1129	70.2%		
うち、認知症			567	35.3%
うち、知的発達障害			0	0.0%
就労中	52	3.2%		
不明	32	2.0%		
計	1608	100.0%		

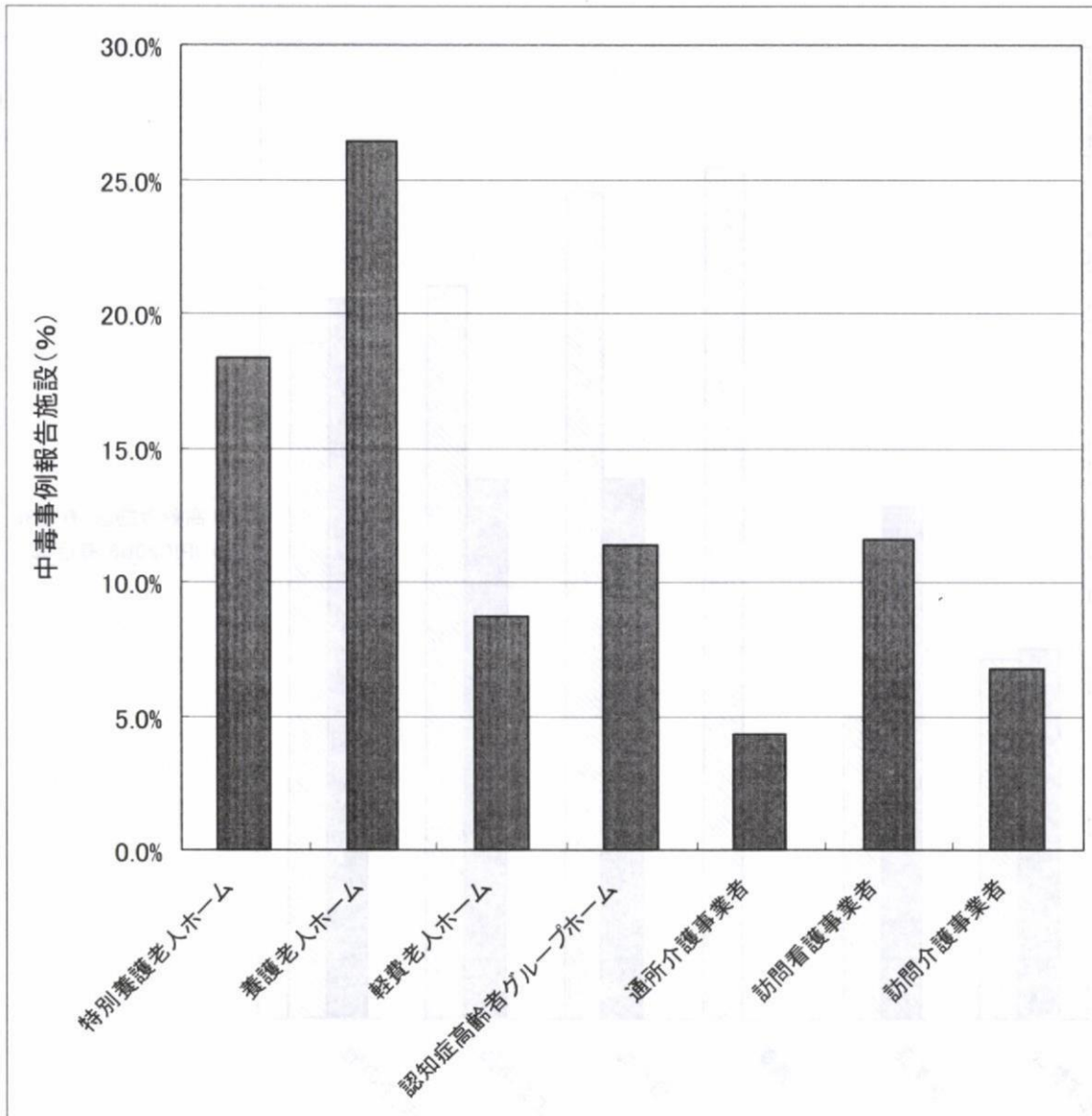


図6 高齢者施設の種類の中毒事故(高齢者施設等の調査、JPIC2006年)

図6 高齢者施設の種類の中毒事故(高齢者施設等の調査、JPIC2006年)

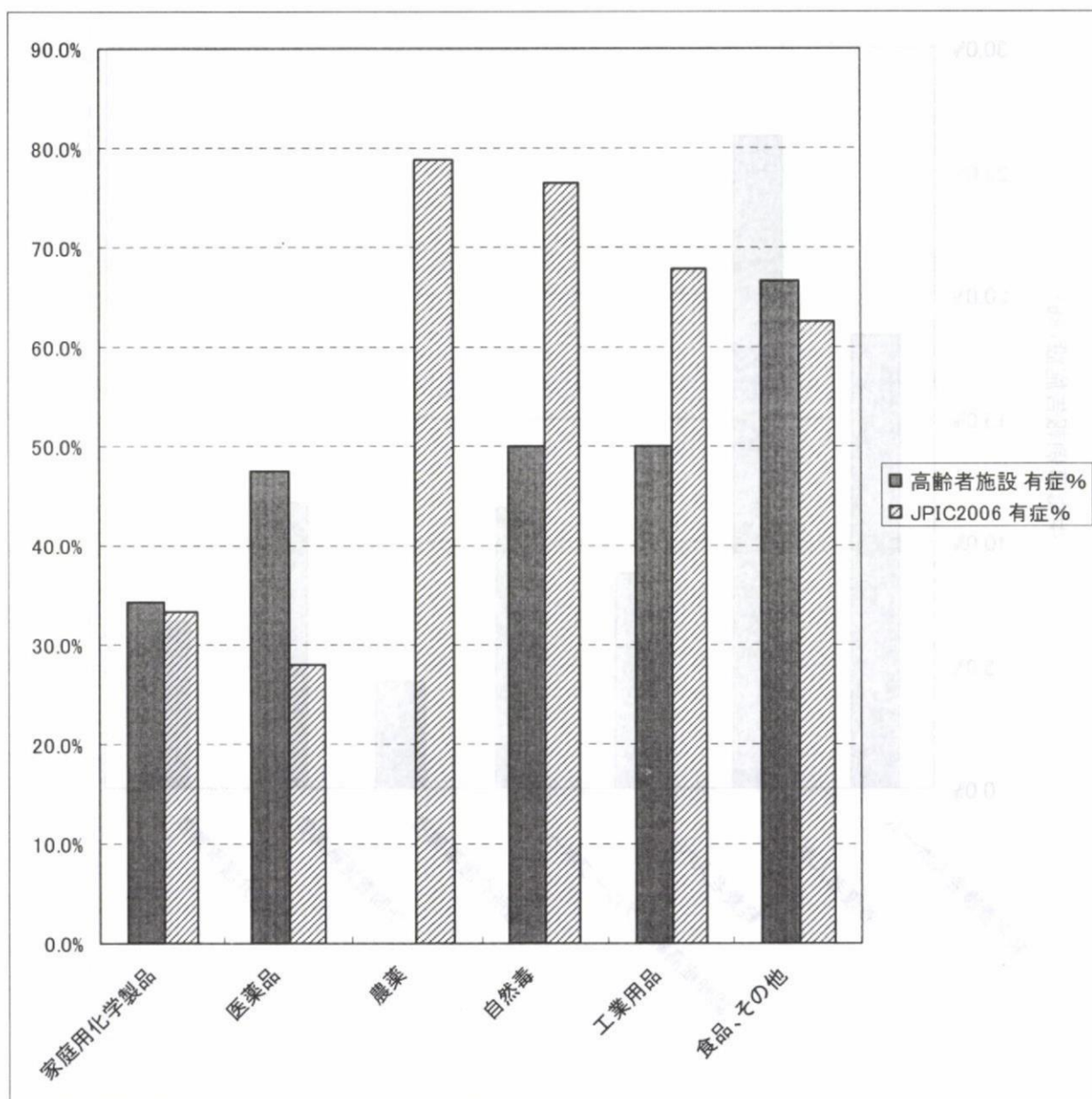


図7 起因物質別 有症率(高齢者施設等の調査、JPIC2006年)

(平80050191, 査聴の幸延時吉創高) 誌奉審中ノ資料ノ免許書種高 図

高齡者中毒事故 事例集

1. 高齡者中毒事故事例集

2010年10月

12月

12月

1. 高齡者中毒事故事例集
2. 高齡者中毒事故事例集
3. 高齡者中毒事故事例集
4. 高齡者中毒事故事例集
5. 高齡者中毒事故事例集
6. 高齡者中毒事故事例集
7. 高齡者中毒事故事例集
8. 高齡者中毒事故事例集
9. 高齡者中毒事故事例集
10. 高齡者中毒事故事例集

12月

2010年10月

12月

12月

12月

12月

12月

12月

12月

1. 高齡者中毒事故事例集

2010年10月

12月

12月

12月

12月

12月

1. 高齡者中毒事故事例集

12月

12月

12月

12月

12月

12月

12月

事例01

曝露物質分類
曝露物質
曝露物質詳細
曝露経路
曝露量
患者年齢層
転帰

家庭用品
鮮度保持剤
〈消石灰・鉄・活性炭〉
経口
少量
65歳以上
生存(外来処置)

症例タイトル

口腔粘膜異常が出現した例

患者

74歳(女性)

症例要旨

ペーコンに同封されていた脱酸素剤を調味料と思い、焼いたペーコンにふりかけて食べてしまった。口に入れた際に苦味を感じ口唇部から口の中にかけてビリビリしたため、食べるのを止めた。食事をしたが口唇から口の中がしみるため心配になり20分後に来院した。右側口唇部から口腔粘膜に発赤と軽度びらん様所見を認めた。JPIQに問い合わせた脱酸素剤の成分等を確認したところ、含有する消石灰によるものと考えられた。水をコップ1杯程度飲むように指示し、口腔用テキサメタソン軟膏を処方して帰宅させた。5日後には完治した。

出典

典拠例/特異例

典拠例

重症度判定

軽症

Poison Severity Score

症例評値(コメント)

成分中の消石灰による症状とおもわれる。

事例02

曝露物質分類
曝露物質
曝露物質詳細
曝露経路
曝露量
患者年齢層
転帰

家庭用品
鮮度保持剤
〈鉄・シリカエタノール〉
経口
1袋
20-64歳
生存(無処置)

症例タイトル

鮮度保持剤を包装のまま誤食して喉頭蓋野に裂傷をきたした例

患者

60歳(女性)

症例要旨

羊羹に鮮度保持剤が付着していることに気付かず、羊羹と一緒に鮮度保持剤を袋ごと食べてしまった。咽頭に違和感があるため摂取1時間後に来院したところ、喉頭蓋野に左右に続く裂傷を認めた。軽症と判断し、無処置にて経過観察することとした。

出典

典拠例/特異例

特異例

重症度判定

軽症

Poison Severity Score

症例評値(コメント)

中毒ではなく包装による粘膜の損傷例である。

曝露物質分類
曝露物質
曝露物質詳細
曝露経路
曝露量
患者年齢層
転帰

家庭用品
基礎化粧品
ハンドクリーム
経口
不明
65歳以上
生存

症例タイトル

一過性の嘔吐のみみられた症例

患者

85歳(女性)

症例要旨

糖尿病コントロール目的で入院中の患者が、院内にて机の上に放置されていたハンドクリームを夜に誤食した。クリームには指ですくった形跡が残っていた。初診時に嘔吐があり次第に傾眠傾向となったがVital Signは安定していた。輸液投与にて経過観察したところ、その後嘔吐はなく、一過性であった。

出典

日本中毒学会誌

典事例/特異例

重症度判定

Poison Severity Score

症例評価(コメント)

典事例/特異例

重症度判定

Poison Severity Score

症例評価(コメント)

曝露物質分類
曝露物質
曝露物質詳細
曝露経路
曝露量
患者年齢層
転帰

家庭用品
基礎化粧品
化粧水<エタノール>
経口
100mL
65歳以上
生存

症例タイトル

顔面紅潮のみ出現した症例

患者

75歳(男性)

症例要旨

要介護度4にて老人保健施設に入居中の患者が自室内の化粧水100mLを誤飲した。直後に職員が発見し来院した。30分後の来院時、バイタルは安定しており、意識障害もなかったが、軽度の顔面紅潮が疑われた。輸液投与して、ビタミンB群製剤の内服を処方した。その後、他の症状の出現はなく、翌日の診察時には、顔面紅潮も完全に消失していた。

出典

日本中毒学会誌

典事例/特異例

重症度判定

Poison Severity Score

症例評価(コメント)

化粧水に含まれるエタノールによる症状のみみられたものと考えられる。

曝露物質分類
曝露物質
曝露物質詳細
曝露経路
曝露量
患者年齢層
転帰

家庭用品
洗剤・シャンプー
く石けん
経口
1個
65歳以上
生存

症例タイトル

消化管腐食性病変(咽頭喉頭部、胃内)がみられた例

患者

86歳(女性)

症例要旨

普段より痴呆がある老人で、本人の話では石けん1個全部を餅と間違えて食べてしまった。唇の腫れに気づき来院した。来院時、嘔吐、腹痛に加え、咽頭喉頭部腫脹、発赤、びらんが著明で、血液生化学検査では特異的な異常はなかったが、胃内視鏡検査では胃体部～胃前庭部にかけての広範な発赤、びらんがみられ、保存的治療で1週間後に軽快した。

出典

典型例/特異例

典型例

重症度判定

軽症

Poison Severity Score

症例評価(コメント)

曝露物質分類
曝露物質
曝露物質詳細
曝露経路
曝露量
患者年齢層
転帰

家庭用品
入れ菌洗浄剤(錠剤)
(溶解洗浄液:弱アルカリ性)CV
経口
1錠
65歳以上
生存

症例タイトル

嘔気を訴えるのみで自然軽快した例

患者

82歳(女性)

症例要旨

入院中、床頭台に置いてあった入れ菌洗浄剤を内服薬と誤認して飲み込んでしまった。誤飲10分後の診察時には嘔気を訴え、牛乳180mLを経口投与したところ、自然軽快し明らかなき症状は出現しなかった。

出典

典型例/特異例

典型例

重症度判定

軽症

Poison Severity Score

症例評価(コメント)

嘔吐を繰り返す。喉痛は軽微で、消化管穿孔や出血は認められず、経過観察を要する。入院後、嘔吐が頻回となり、脱水傾向を認めたため、点滴補液を開始した。嘔吐は徐々に軽減し、2日後に退院した。

80歳(女性)

一服の誤飲による軽症例

嘔吐

咽頭痛

腹痛

嘔吐

入院後2日間

軽症回復

軽症回復

軽症回復

家庭用品
入れ歯洗浄剤(錠剤)
(溶解洗浄液:中性)
経口
1錠
65歳以上
生存(入院4日)

曝露物質分類
曝露物質
曝露物質詳細
曝露経路
曝露量
患者年齢層
転帰

症例タイトル
口腔粘膜異常、咽頭部腫脹が出現し気管挿管、酸素投与を要した例

患者
78歳(女性)

症例要旨
昼夜徘徊、見当識障害、失禁状態にある高齢者。夕食後自室に入り4時間後に台所で水を飲んでいた。口唇腫脹し発語できず、呼吸状態不良であり、家人が水をのませたところ嘔吐した。入れ歯洗浄剤の空包装が自室にあり、患者のポケットにも入れ歯洗浄剤が入っていたことから、同製剤を1個以上経口摂取したと考えられ、15分後に受診した。受診時、意識レベルは昏迷で、興奮しており、口唇腫脹、舌のびらん、咽頭部の腫脹と喘鳴がみられた。血液ガス所見はpH 7.391、PaO₂ 47.5mmHg、PaCO₂ 43.7mmHg、BE -1.9mEq/Lと低酸素血症であった。気管挿管、酸素吸入、胃洗浄、輸液を行い33時間後に抜管した。気道閉塞はなく経口摂取可能であるため第4病日に完治退院となった。

出典

典拠例/特異例
重程度判定
Poison Severity Score
症例評価(コメント)

典型例
重症

重程度判定
Poison Severity Score
症例評価(コメント)

家庭用品
入浴剤
<バスソルト>
経口
15g
65歳以上
生存

曝露物質分類
曝露物質
曝露物質詳細
曝露経路
曝露量
患者年齢層
転帰

症例タイトル
嘔吐、下痢が出現した症例

患者
90歳(女性)

症例要旨
認知症のため老人保健施設に入居中の患者がバスソルト(硫酸ナトリウム、炭酸水素ナトリウム等含有)を食べているところを発見され、施設で経過観察していた。その後、腹痛感、嘔気が出現したため、発見から3.5時間後に来院した。来院時、顔面蒼白、嘔気、腹痛、下痢がみられた。来院後に嘔吐が1回あり、輸液投与にて利尿をかけた経過観察していたところ、2時間後には症状が軽快し施設に帰宅した。

出典

典拠例/特異例
重程度判定
Poison Severity Score
症例評価(コメント)

典型例
中等症

バスソルト中の硫酸ナトリウムによる下痢がみられたものと考えられる。

曝露物質分類
曝露物質
曝露物質詳細
曝露経路
曝露量
患者年齢層
転帰

家庭用品
洗剤・シャンプー
<シャンプー>
経口
120mL
65歳以上
生存

症例タイトル

嘔吐、頻回の下痢が出現した症例

患者

79歳(男性)

症例要旨

腰椎圧迫骨折のため入院中の患者のベッドサイドに置いていたシャンプーの量が減っていることに屋過ぎ頃家族が気づく。その3時間後の夕方に水様性下痢が出現し、さらに2時間後に嘔吐があった。吐物の臭いから患者がシャンプーを誤飲したことが疑われた。また、血圧低下と頻脈がみられた。全身管理を開始し輸液負荷にて血圧低下と尿量減少は改善した。白血球の増多と膈炎に対して抗生剤を投与した。下痢は3日目には回数が増え、7日目には抗生剤投与を終了し、8日目には食事摂取も良好の出現無く、4日目には消失した。その後の流動食開始後も下痢好となり略治した。急激に発症する下痢、嘔吐への対応が重要であると思われた。

出典

典型例/特異例

典型例

重症度判定

重症

Poison Severity Score

症例評価(コメント)

界面活性剤の多量服用の典型例。消化管のびらん、浮腫などをきたしたものであろう。処置が遅ければショックが進行して高齢者の場合死亡する例もある。

曝露物質分類
曝露物質
曝露物質詳細
曝露経路
曝露量
患者年齢層
転帰

家庭用品
洗剤・シャンプー
<毛糸・おしやれ着用合成洗剤(液体)>
経口
100mL
65歳以上
生存

症例タイトル

消化器症状、意識障害、体温低下、アシドーシスが出現した高齢者症例

患者

90歳(女性)

症例要旨

患者が倒れた際に洗剤の容器と吐物があるのを家人が発見し、来院した。来院時、顔面蒼白で四肢冷感、体温は34.8℃と低下、意識障害(GCS:E1V1M4)をみとめた。輸液により意識レベルは速やかに改善した。来院30分後の採血で代謝性アシドーシスを認めため、炭酸水素ナトリウムを投与したところ、翌朝には改善した。嘔気、嘔吐は来院後6時間程度で治まり、入院3日目に退院となった。

出典

典型例/特異例

典型例

重症度判定

重症

Poison Severity Score

症例評価(コメント)

アシドーシスの進行がありショック状態の進行が考えられる。

曝露物質分類
曝露物質
曝露物質詳細
曝露経路
曝露量
患者年齢層
転帰

家庭用品
洗剤・シャンプー
〈毛糸・おしゃれ着用合成洗剤(液体)〉
経口
200mL
65歳以上
生存

症例タイトル
嘔吐物により窒息、呼吸停止を来した症例

患者
90歳(女性)

症例要旨
ペットボトルに入れておいた洗剤を水と混ざって飲んで、患者が家人に訴え、救急車で来院した。採取時刻は不明で、嘔吐が1回あり、来院時には意識障害(Ⅲ-300)と血圧低下、呼吸抑制があった。輸液投与し胃洗浄を行った。来院後の採血時に呼吸停止したため、挿管、人工呼吸をおこなった。呼吸停止の原因は嘔吐物による窒息と思われる。1時間程度で意識自己抜管した。入院翌日には症状もなく、内視鏡検査を実施後に飲食を開始した。軽度食道炎が残るも、入院5日目に退院となった。

出典

典型例/特異例
重症度判定

Poison Severity Score

症例評価(コメント)

特異例
重症

嘔吐による窒息→呼吸停止は界面活性剤の直接作用ではなく、シヨックや血圧低下に伴う中枢神経系の抑制によるかであろう。

曝露物質分類
曝露物質
曝露物質詳細
曝露経路
曝露量
患者年齢層
転帰

家庭用品
洗剤・シャンプー
〈台所用合成洗剤〉
経口
不明
65歳以上
生存

症例タイトル
嘔吐、下痢、血圧低下が出現した高齢者症例

患者
83歳(女性)

症例要旨
認知症等でグループホームに入所中の患者が、昼前に2回嘔吐し、ぐったりしているところを職員に発見された。また、発見とほぼ同時に水様性下痢が頻回出現した。吐物は約200mL程度の液体で泡が一杯であり洗剤の臭いがしていた。普段しつとしていない患者であるが、発見2時間後の来院時は活動性が低下し血圧も低かった(収縮期99mmHg/拡張期63mmHg)。500mLの輸液投与の途中から活動性が上昇し回復した。

出典

典型例/特異例
重症度判定

Poison Severity Score

症例評価(コメント)

典型例
重症

界面活性剤の多量服用による消化管の浮腫などがあつたと考える。プレシヨック状態で重症。